

平成 28 年度

事業所名 : グループホーム 愛の手 (2階ユニット)

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0390100030		
法人名	有限会社 ケアホーム愛の手		
事業所名	グループホーム愛の手 (2階ユニット)		
所在地	盛岡市青山1丁目19-51		
自己評価作成日	平成 28 年 8 月 10 日	評価結果市町村受理日	平成28年11月28日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaijokensaku.jp/03/index.php?action_kouhyou_detail_2015_022_kani=true&JigyosyoCd=0390100030-00&PrefCd=03&VersionCd=02
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通二丁目4番16号
訪問調査日	平成 28 年 8 月 23 日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

8年以上の長期にわたり入所されている方が14名中6名、5年以上の方は3名いらっしゃる。皆さん大病することもなく健やかに過ごされている。日々のケアがよいからと自負している。レベル低下は見られてもいつまでも自分の足で歩き・口から食べ・トイレで排泄できるよう支援している。自分のペースを守りのんびりと過ごしている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

ホームは1階に9人、2階に5人の2ユニットで、開設から15年である。利用者の中には10年以上の入居者もあり、年齢も最低78歳、最高97歳、平均年齢は89歳で、要介護度4以上の人が9人と高齢化と重度化が進んでいる。そのためホームでは、一日一日を大切にしながらケアに当たっている。今年度、理念を見直し「支え合う やさしい家」とした。その中で一層の高齢化と重度化傾向の中で外出の機会が少ないが、利用者に見せたいという職員の気持ちから高松公園の桜祭りや着町の七夕まつりに出かけたり、町内会の皆さんによる席取りの協力のもとでチャグチャグ馬っこを見学したりと地域との関わりを大切にしている。ホームの中では利用者は穏やかで自由に過ごしており、読書好きの利用者には読みたい本の希望を聞きながら本を用意するなど、積極的な関わりを惜しみなくしている。特に、利用者も一層高齢となり身体も衰えていく中で、これまでとは異なる支援の在り方を模索しながら個々にあった介護支援の取り組みを進めていることは大いに評価できる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

【評価機関:特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会】

事業所名 : グループホーム 愛の手 (2階ユニット)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	開所当時からの理念は継続されている。が現実にはかなわない部分もでてきているので状況に応じた新しい理念を作成するようにしている。	懸案であった理念の見直しを行い、今年6月にスタッフ間で話し合い「支え合うやさしい家」とした。趣旨は、利用者と共に支え合い、どんな場面でも、やさしさを持って接することを心に留めながら、利用者は同じ屋根の下で暮らす家族みたいなものとしている。	これまでの理念をも継承しつつ、利用者のための現実に即した理念が作成されたが、今後はこの理念に沿った具体的な取り組みについて「どうすれば」実践に繋がるかなどの話し合いを期待したい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の行事にはできるだけ参加するようにしている。(さくらまつりやチャグチャグ馬つこの見学など)	地域の草取りや公民館の文化祭等の参加は、高齢化、重度化により年々難しくなっているが、機会を捉え、チャグチャグ馬つこの見学の時には、近くの公民館の一等席に席取りをしてもらったり、散歩時に声掛けを得るなどしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	グループホームの存在もだいぶ知られるようになってはきているが、地域の発信にまで至っていない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	町内会長さんや包括の職員から地域やその他さまざまな情報を提供して頂き、グループホームの活動にいかしている。	会議を通じて町内会長にはチャグチャグ馬つこの席取りなどの協力をお願いしているほか、地域包括支援センターには、長期利用者的高齢化・重度化への対応の在り方等の話題や情報交換をしている。	会議では報告だけでなく、地域との繋がりのきっかけづくりや、ホーム運営の在り方等の意見・提案を頂けるよう身近な話題や様々な「相談事」を交えるほか、事業所全体とのコミュニケーションを深めるため職員を参画させることも一考と考える。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	メールのやり取り、文書の提出など 課せられた課題はこなすよう努力している。	行政とは、主として文書やメール、電話でのやり取りで円滑に対応している。また困りごとなどの身近な相談は、運営推進会議の委員でもある地域包括支援センターにすることが多く、協力関係も築かれている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	拘束には職員が過敏になるほど注意している。やむをえない時はさりげない工夫をしている。玄関は施錠していない。	高齢で要介護度4以上が多い中で、かつ2階建てであることから移動時等の安全には注意している。一方身体拘束をしない取り組みは内外研修への参加し意識の高揚に努めている。具体には着替え時や利用者に接する際の抑制的な言葉がけには特に留意しながらケアにあたっている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員同士が観察をし、あざなどができている場合なぜできたのかを追求し原因を究明する。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	後見人がついている利用者もいることから日頃から連絡を密にしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入所時はもちろん改訂事項が生じた場合には、その都度家族に説明し理解を得るようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族の要望などは即上司に報告し、実践できることは即実行するようにしている。 意見箱を設置している。	毎月家族に報告している手書きの「お便り」や、2か月毎の「愛の手だより」を通じて利用者やホームの活動状況をお知らせし家族の安心に繋げている。家族の意見等はこれまで特にないが、引き続き家族の来訪時に要望などを聞くように努め、意見については反映に努めたいとしている。	ご家族の意見・要望はホーム運営にとって貴重なものと考えます。アンケート調査、メール、お便りの中に「ご意見」欄を設けるほか、家族の来訪時や、家族会、運営推進会議など様々な場面で、気軽に言いやすい環境づくりが大切と思われるため一考願いたい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	常時職員の意見など傾聴できる雰囲気づくりをしている。 代表者へ職場や業務への要望や意見を文書で提出する機会がある。	代表者が職員と面談したり管理者が随時職員の意見を聞いている。その結果例えば新人やパート職員が増えたことに伴う服薬管理等の業務改善の取り組みや、車椅子に乗ったまま測定できる体重計を導入している。	業務改善に係る提案方法は、「気づき」と「話題」という点から考えると「ミーティング時の利用」や、「業務日誌へのメモ」も一考と考える。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	法人内の他事業所との全体会議を1か月に1度開催し情報や意見交換をしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修案内は常時提示し公開している。 新人が入ってきたときにはマンツーマンで教えている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム協会定例会への参加 他事業所の職員と接する機会がある時の情報交換を大切にしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人のニーズを大切にし、他事業所との情報交換を大切にしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族との話し合いの機会を多くもち要望を伺い、不安はなくすよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人の要望はもちろんの事、訴えることができない利用者のニーズも表情やしぐさから拾いあげることができるよう職員は努力している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	同じ屋根の下家族と過ごす時間より長い時もある。職員の年齢もさまざまである。利用者と支え合い信頼し合える関係を築きたい		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	定期的に家族の面会はある。来訪された家族とのコミュニケーションを大切にしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないう、支援に努めている	家族との面会も途切れがちだがホームへの訪問は大歓迎である。	ホームでは、たまに家族や友人の訪問があるほか、時々外出レクリエーションや着町の七夕まつりに出かけているが、利用者の高齢化や重度化に伴い、馴染みの人や場との関係が年々希薄になっていると認識している。	家族や友人、ボランティア等の来訪も途切れがちのため、利用者にとって家族等は遠い存在となっている。この打開の一つとして職員や運営推進会議等で話題にしたり、ホーム内で月1回の家族との会食等を開催するなど一考してはいかがでしょうか。
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の係わりを大切にしている。席順など常に配慮している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所してからも今後の相談などしてくる家族もある。その時は丁寧に対応している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	自分の意思を伝えることができない方が増えているので、利用者に寄り添い出来るだけ思いに沿うように支援している。	自分の思いなどを話すことが難しい利用者が増えている中で、読書好きな方には何を希望しますかなどと本人の意向を汲み取り希望を叶えるよう努めているとともに、何らかの情報を把握したときは、送り時やカンファレンス時を通じて情報の共有に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ホームのスケジュールに無理に合わせるのではなく、できる範囲で今までの生活を大切していく。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	身体的レベルに差があるのでそれぞれに見合った過ごし方をしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	家族の意見を取り入れ、また職員間でカンファレンスを行い各利用者に即したケアを行っている。	アセスメントやモニタリングをくり返し、利用者の状態の変化や行動を日々記録して、職員間で話し合い、また家族の意見を聞きながら、現状に即した介護計画を作成している。	97歳と高齢の方がいる中で「健康で元気で過ごすことに留意しながらも、その人にとって、「ちょっとしたことの楽しみを見出し」「幸福感をもって日々を過ごす」支援は何かの視点を介護計画に入れ反映することも、これから一層必要と考える。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	各利用者ごとに毎日経時的に記録をしている。毎日行うケアは個別にチェックしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々にも生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	身体レベル低下に伴った支援が増えている。食事、排泄など個々に応じた支援を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	市の健康診断や予防接種助成を利用している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	協力医はいるが家族や今までのかかりつけ医を希望される方はそのまま継続できるように支援している。	かかりつけ医への通院には、ほとんど職員が対応している。また協力医による往診も毎月行っており健康管理などにも留意しているほか、歯科の往診もお願いしている。医療の受診結果については家族に伝えるなど適切な医療支援に努めている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	2週間に1度同法人の訪問看護ステーションの訪問をお願いしている。こまったことや相談事があればいつでも対応ができる環境にある。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には情報提供をしている。早期退院を余儀なくされることが多いのでその時には受け入れている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	家族が希望されれば看取りも行う。その時には承諾書を交わし医師や訪問看護と協力しながら職員一貫となりホームでできるケアを行う。(実績あり)	これまで複数人の看取り経験を有しており、重度化や終末期に関する指針に沿って、本人、家族に充分説明し、意思確認を行っている。実施の際には訪問看護ステーションの支援を得るほか、日頃から職員は内外の研修を受講し、必要な知識や技術の習得に努めている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	AEDを設置している。職員は講習を受けその時に備えている。実際に使用した経験あり。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	災害に備え多少の食品の備蓄をしている。避難訓練は年2回実施している。	ホームは街中にあり、災害時対応は火災対策を重視し、年1回は消防署の立会いの下で避難訓練を行っているほか、参加可能な利用者と共に夜間想定した独自の訓練を実施している。防火対策のためIH化しているが、近隣住民による支援策が十分でないため今後の課題としている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	職員は利用者一人一人に合った言葉がけをしている	開設時からの入居者もお互い馴れて気心がわかり合う中でも、一人ひとりの生活歴などにも配慮し、呼びかけ時の言葉遣いなどに注意している。特にトイレや入浴介助、着替えの際の羞恥心や対応の在り方で尊厳を損ねることのないよう心がけている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	ささいなことから自分の意思を出せるよう声掛けをしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	決まったスケジュールはなく、その日の状況に応じ過ごしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	季節やその日の気候に応じ衣服を選んでいる。 汚れた時などはすぐに更衣をする。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	お手伝いができる利用者が減ってきている。簡単なできることをお願いしている。	年々刻み食やミキサー食など、手を加えた食事の利用者が増えている。そのため食事の際は、ゆっくりと食べ、個人に合わせた食事時間を取っている。また人数が少なくなったが、食材の下ごしらえや食器拭き、配膳の後片付けなど、できる範囲で役割を發揮している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	各利用者にあつた食事形態をとっている。刻み食やミキサー食など ご飯の量も各人に合わせている。食事量のチェックも毎回行っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	全員が口腔清掃ができるよう一人ひとりに職員がついて行っている。 利用者ごとにハブラシの種類も変えている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	できるだけトイレで排泄できるよう時間で誘導している。排泄時のサインなど見逃さないように注意している。 できるだけ布パンツを使用し、夜間のみオムツにしたりする方もいる。	それぞれの排泄パターンを見計らいトイレ誘導したり、リハビリパンツから布パンツに変更しながら、排泄の自立に向けた支援を行っている。一人だけ例外的に夜間のポータブルトイレを使用しているほかは、日中・夜間とも全員トイレを使用している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	各利用者の排便パターンを知り下剤の調節をする。 できるだけ下剤を使用しないよう水分や食品に気を付けている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	週2回入浴している。リフト浴を使用している方が大半なので、日勤職員によって入浴日を変更せざるえない時がある。	多くの利用者は一人で体を洗えず職員の支援を必要とするほか、利用者の入浴時の安全・安堵の確保と職員の負担軽減のため、リフト浴の利用が多い。入浴中は歌を歌ったり、話しかけたりしながらくつろぎ、楽しめる入浴ができるよう配慮している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	その日の体調や習慣により利用者ごとの休息を取っている		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	提携している薬局があり、管理、分包、残薬チェックなどお願いしている。職員は服薬介助、チェックを行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	趣味や家事活動において各利用者ができることをしていただく。 誕生日会などでご本人の好物を出したりしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	家族と出かけるのはいつでもOKである。ホームではなるべく全員での外出を実行するようにしている。 日々の散歩もできるだけするようにしている。	天気の良い日にはできるだけ日向ぼっこや散歩に出かけるよう心がけてはいるが、高齢化・重度化により難しくなったとしている。その中で家族と一緒に出掛けたり、時には職員全員で近くの高松公園の桜祭りや沿道でのチャグチャグ馬っこ見物など、戸外出かける機会の確保に努めている。	入居者の年齢は最低78歳、最高97歳、平均89歳で、徐々に体力も衰え、外出も厳しくなるのではと懸念していることから、「日常的な外出」にこだわることなく、ホーム内外での代替となる健康保持やストレス解消、家族との交流、地域ボランティアの支援などの取り組みを今後期待する。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を使う機会はなくなってきている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	手紙がきたときは本人にお見せする。その後家族に渡している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	室内の適温を保つため暖房や冷房を活用している。 加湿器や空気清浄器を設置している。 掲示物は季節ごとに変えている。	1階、2階ともほぼ同じつくりで、居間兼食堂、畳コーナー、ゆったり過ごすソファがあり、自分の好きな場所で本を読んだり、ぬり絵などしながら思い思いに過ごしている。また四季を通じて快適に過ごせるようファンヒーターやパネルヒーターのほか、加湿器や空気清浄器を設置し室内環境や体調管理にも気を付けている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホール空間は何処でもお話ができるスペースがある。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	お人形や写真を飾り、好きなようにコーディネートされている。	居室の入り口には利用者の名前が書かれた様々な模様の暖簾が掛けられ個性を出している。壁には写真やカレンダーなどを貼ったり、仏壇やぬいぐるみを持ち込んでいる人もいる。レンタルのベッドは、それぞれ個別に工夫しながら置き安全に配慮しながら居心地よく過ごせる工夫をしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	歩行時に支障がないよう物の配置に気を付けている。 いたるところに手すりを設置している。		